

田園調布学園大学大学院人間学研究科 子ども人間学専攻教職課程履修規程

(目的)

第1条 この規程は、田園調布学園大学大学院学則（以下「学則」という。）第37条に基づき、田園調布学園大学大学院人間学研究科（以下「本研究科」という。）における教職課程の履修に関し、必要な事項を定める。

(免許状の種類)

第2条 本研究科において取得できる教育職員免許状の種類は次のとおりとする。

子ども人間学専攻

幼稚園教諭専修免許状（以下「免許状」という。）

(免許状授与の所要資格)

第3条 免許状授与の所要資格を取得しようとする者は、学則第40条に定める修士課程を修了し、かつ、教育職員免許法（平成28年法律第87号）及び同法施行規則（平成29年文部科学省令第41号）に定める所要の単位を修得しなければならない。

2 前条に規定する免許状を取得しようとする者は、学士の学位を有し、幼稚園教諭一種免許状を取得していることを原則とする。

(授業科目及び所要の単位)

第4条 教職課程は、教科に関する科目、教職に関する科目に区分し、別表の授業科目の中から所要の単位を修得するものとする。

(履修登録)

第5条 教職課程の授業科目を履修しようとする者は、所定の期間において履修登録を完了しなければならない。

(成績評価及び単位の認定)

第6条 教職課程の授業科目に係る成績評価及び単位の認定については、学則第39条及び第40条を準用する。

(科目等履修生)

第7条 学則第48条により、教職課程の授業科目の履修を希望する者がいるときは、教授会の議を経て、学長が科目等履修生として履修を許可することができる。

(免許状の授与申請)

第8条 第3条第1項及び第4条の規定により、所要の単位を修得した者は、一括または本人により、都道府県教育委員会に免許状授与の申請ができるものとする。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成31年4月1日から施行する。

2 第3条に規定する教育職員免許法及び同法施行規則及び第4条に規定する別表は、施行日の前日に在籍する学生には適用せず、なお従前の例による。

附 則

- 1 この規程は、令和3年4月1日から施行する。
- 2 改正後の第4条に規定する別表の授業科目のうち「児童家庭福祉特論」は施行日の前日に在籍する学生には適用せず、なお従前の例による。

別表（第4条関係）

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目名	配当年次	単位数		備 考
			必 修	選 択	
教科に関する科目	子どもとアート論	1・2前		2	左記授業科目から 24単位以上選択履修
	子どもとことば論	1・2後		2	
教職に関する科目	教育的ケアリング特論	1・2後		2	
	学び学特論	1・2後		2	
	保育学特論	1・2前		2	
	子ども思想史特論	1・2後		2	
	保育実践研究	1・2後		2	
	保育者特論	1・2前		2	
	子ども・子育て支援実践研究	1・2後		2	
	児童家庭福祉特論	1・2前		2	
	家族社会学特論	1・2後		2	
	子ども政策特論	1・2後		2	
	教育学特殊研究	1・2前		2	
	子ども環境学特論	1・2後		2	
発達心理学特論	1・2前		2		
保育・教育課程研究	1・2後		2		

科目名	子どもとアート論	副題	
担当者	安村 清美・斉木 美紀子 (オムニバス・一部共同)		
開講期	前期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	<p>子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子ども期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう、理論と実践を往還しながら研究する。</p> <p>安村担当の講義では、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。</p> <p>斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現する主体としての自分についても探求しながら、アート教育についての理解を深めていく。</p> <p>その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出合い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 幼児期の子どもにとって、アートと出合い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。</p> <p>2. 幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	「子どもとアート」について (人間としての子ども期のアート経験の意味) (安村・斉木)		
2	教育現場とアーティストの関わり①—子どもの育ちに関わる意味と可能性について(安村)		
3	教育現場とアーティストの関わり②—共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーション(安村)		
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート—実践記録を読む(安村)		
5	表現する身体：表現とプロセス、作品—実践記録、論文を読む(安村)		
6	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味①ディスカッション		
7	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味②実践・事例報告		
8	子どもの音楽表現の芽生えと学び (斉木)		
9	子どもと音環境 (斉木)		
10	子どもとうた (斉木)		
11	子どもと楽器①民族楽器にふれる(斉木)		
12	子どもと楽器②楽器と関わる子ども (斉木)		
13	文化と子ども (斉木)		
14	課題のディスカッション・プレゼンテーション (安村・斉木)		
15	課題のプレゼンテーション、まとめと講評 (安村・斉木)		
期末			
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。		
評価方法及び評価基準	小レポート (30%)、実践課題 (30%)、プレゼンテーション (40%) を基に総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出会ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。		
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	<p>『松本千代栄撰集 2 人間発達と表現』舞踊文化と教育研究会 (編者代表：安村) 編、2007、明治図書</p> <p>『保育の中のアート』磯部、福田、2015、小学館</p> <p>『子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践』佐藤、今井編、2003東京大学出版会</p> <p>『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会</p> <p>『音楽を学ぶということ』今川、2016、教育芸術社</p>		

科目名	子どもとことば論	副題	多文化共生時代の子どもとことば
担当者	内藤 知美		
開講期	後期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	<p>子どもの総合的発達におけることばの問題について、0歳から就学前までの時期の子どものことばの発達過程とことばの獲得に関わる社会・文化環境について理解を深める。家庭、幼稚園、保育所などの生活における子どものことばに関わる多様な事例を通して、子どもの生活や遊びと大人―子ども関係、子ども同士の関係がことばの発達にどのように相互に影響するのか、関係論的視点から検討する。また子どもを取り巻く社会・文化環境の変化、例えば乳幼児期からの視聴覚メディアの受容、日本語を母語としない子どもの増加、言葉の関わりのもちにくい子どもの問題など、子どもとことばを取り巻く今日的課題を捉える視点をもつことが目標である。また絵本などの児童文化財と子どもの関わりを探究し、実際の保育において子どものことばを育てることの意味を理解する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもが多様ななかかわりの中でことばを獲得していく過程について理解を深める。特に子どもが主体的にことばを使用することに着目し、ことばの獲得における「教え―教えられる」保育・教育の枠組みを問い直す。</p> <p>2. ことばをめぐる理論の動向を踏まえるとともに、具体的な事例を通して、現代社会に生きる子どものことばの発達を問い、具体的かつ実践的視点から子どものことばが育つこと、そしてことばを育てることの意味を探究する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	子どもとことばの関係性		
2	子どもとことばをめぐる社会環境・文化環境		
3	ことばの発達と保育（0歳期）		
4	ことばの発達と保育（1語発話の時期）		
5	ことばの発達と保育（2語発話の時期）		
6	ことばの発達と保育（2歳期・3歳期）		
7	ことばの発達と保育（4歳期・5歳期）		
8	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助①―多文化・多言語と子ども		
9	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助②―ことばとコミュニケーション（ビデオカンファレンスを通して）		
10	事例検討：同調、リズムとことば		
11	事例検討：共感性とことば		
12	事例検討：創造性や思考とことば		
13	ことばを育てる児童文化財の活用①―絵本などの児童文化財とことばの関係性		
14	ことばを育てる児童文化財の活用②―文化財を用いた子どものことばの育ちあい		
15	子どものことばと視聴覚メディア		
期末			
授業に関する連絡	個別のメールおよびでんでんばんを通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	小論文（レポート）50%、期末課題 50%		
事前・事後学習の内容	子どもとことばの発達をめぐる新しい理論、研究を随時紹介するので、関連する資料を熟読すること		
履修上の注意	保育事例検討では受講生が自ら考え、積極的に発言することを望む。また「子ども」や「ことば」に関する関連文献を読み、学びを深めることを期待する。		
テキスト	今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書、2013年、幼稚園教育要領（平成29年告示）、保育所保育指針（平成29年告示）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示）		
参考文献	岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書1982）、麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社1992）青木保『異文化理解』（岩波新書2001）、佐伯胖『共感』（ミネルヴァ書房 2007）、今井むつみ『ことばと思考』（岩波新書2010）など授業中に適宜指示する。		

科目名	教育的ケアリング特論	副題	
担当者	吉國 陽一		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>社会的な動物である人間にとってケアリングは生きることの根底にある営みと言える。一方で、ケアリングは生産優位の産業社会の中で女性というジェンダーに結び付けられながら、シャドウ・ワーク（支払われない仕事）としてその価値を貶められてきた経緯がある。文化人類学者のデヴィット・グレーバーによれば、全ての労働は本来、他者をケアしながら社会に貢献するという意味でケアリング労働であるが、生産としての労働からケアリング的側面が排除された結果、社会的価値のないブルシット・ジョブ(クソみたいな仕事)の増殖と、保育や福祉、教育など本来社会的価値がある仕事のシット・ジョブ(クソ扱いされる仕事=労働条件の劣悪な仕事)化を招いている。</p> <p>本授業では上記のような背景を踏まえて、民主主義社会、保育、教育、倫理等をより人間的な営みとして再解釈し、編み直す上でケアリングの理論がもつ可能性について文献購読を通して理解を深めることを目指す。特に後半はネル・ノディングズのケアリング論に焦点を当て、保育実践におけるカリキュラムの構成原理や子ども理解の理論的枠組みとしてのケアリングが有する可能性を探る。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアリングの概念とケアリングを取り巻く現代の社会的コンテクストを理解する。 ・ケアリングが民主主義社会、教育、倫理等においてもつ可能性を理解する。 ・ノディングズのケアリング論の保育実践における意義を理解する。 ・ケアリングの観点から受講者それぞれの実践を再解釈することができるようになる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	文献購読① ケアリングとは何か？		
3	文献購読② 民主主義社会におけるケアリングの意義		
4	文献購読③ 倫理学におけるケアリングの意義		
5	文献購読④ 教育におけるケアリングの意義		
6	文献購読⑤ ネル・ノディングズのケアリング論 なぜケアリングにかかわるのか		
7	文献購読⑥ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアする人		
8	文献購読⑦ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアされる人		
9	文献購読⑧ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアリングの倫理 前編		
10	文献購読⑨ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアリングの倫理 後編		
11	文献購読⑩ ネル・ノディングズのケアリング論 学校におけるケアの挑戦		
12	文献購読⑪ ネル・ノディングズのケアリング論 リベラル・エデュケーション批判		
13	文献購読⑫ ネル・ノディングズのケアリング論 代替するヴィジョン		
14	文献購読⑬ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアリングと継続性		
15	文献購読⑭ ネル・ノディングズのケアリング論 自己をケアすること		
期末	試験		
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	文献購読にあたり、各自に作成してもらったレポートには授業の中でコメントを行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート及びディスカッション(80%)、及び最終レポート(20%)を基に評価を行う。		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で扱う文献の該当箇所を読み、レポートを作成する。 毎回の授業内容について復習をする。		
履修上の注意	自分の実践や研究テーマに照らし、問題意識をもって毎回のディスカッションに参加することを期待する。		
テキスト	<p>ネル・ノディングス 立山善康他訳『ケアリング 倫理と道徳の教育—女性の観点から』、晃洋書房、1997年</p> <p>ネル・ノディングス 佐藤学他訳『学校におけるケアの挑戦—もう一つの教育を求めて』 ゆみ出版、2007年</p> <p>ジョアン・C・トロント 岡野八代訳・著『ケアするのは誰か？ 新しい民主主義のかたちへ』 白澤社 2020年</p> <p>広井良典『ケア学 越境するケアへ』 医学書院 2000年</p> <p>※ 必要に応じて上記文献のコピーを配布。なお、テキストは受講生の興味・関心に合わせて変更の可能性あり。</p>		
参考文献	<p>ジェーン・R・マーティン 生田久美子監訳『スクールホーム—ケアする学校』 東京大学出版会、2007年</p> <p>ネル・ノディングス 佐藤学他訳『学校におけるケアの挑戦—もう一つの教育を求めて』 ゆみ出版、2007年</p> <p>デヴィッド・グレーバー s酒井隆史他訳『ブルシット・ジョブクソどうでもいい仕事の理論』 岩波書店 2020年</p>		

科目名	学び学特論	副題	
担当者	生田久美子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>「学ぶ」ということと、「知る」ということ、また「理解する」ということは同義であるか？違いがあるとするならば、それらはどのような関係にあるのか？本講義では、哲学、認知科学（心理学を含む）の学問領域における「学び論」の系譜を辿りながら、新しく生まれ変わり、発展してきている人間学の一領域としての「学び論」に焦点をあてて考察する。最終的に、人間学的観点から発展させた「学び論」を提示する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1・「学ぶ」ということと「知る」ということの違いを理解する。 2・哲学及び認知科学の領域での「学び」分析の系譜を理解する。 3・人間学的観点からの「学び論」の考え方を自らが生成・吟味し成果を発表する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	「学び」と「情報の獲得」との違い		
2	「学び」と「知る」や「知識」との違いへの注目		
3	生活の中での「学び」/学校での学び		
4	「わかる」ということの意味を考える		
5	「わかり方」の探究(1) - 「わかる」とは何か		
6	「わかり方」の探求(2) - 子どもはわかろうとしている		
7	「わかり方」の探求(3) - 「わかる」から「なっとく」へ		
8	「わかり方」の探求(4) - 何のためにわかるのか		
9	「わかり方」の探求(5) - 子どもはみなわかろうとしている		
10	特別講義①正統的周辺参加論(佐伯胖)		
11	特別講義②「二人称的関わり」とは何か(佐伯胖)		
12	特別講義③「遊び」と「学び」(佐伯胖)		
13	事例検討・発表①		
14	事例検討・発表②		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを「リアクション・ペーパー」に書いて提出する。		
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する(50%)。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する(50%)。それらを基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	講義の展開過程で逐次、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読むことが求められる。		
履修上の注意	全講義に出席のこと		
テキスト	佐伯胖著『わかるということの意味』岩波書店		
参考文献	J. レイヴ&E. ウェンガー著佐伯 胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993年		

科目名	保育学特論	副題	
担当者	内藤 知美		
開講期	前期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	<p>子どもは多様な関係性の中で学び、育つ存在である。また保育という営みは、子どもだけではなくそこに関わる保護者や保育者、そして地域、社会の学び、育ちと深く関わる。社会文化的視点から、多様で複雑な状況や文脈において生成される人間の「学び」や「育ち」を捉えるための視座を得るとともに、子どもが今を生きる「保育フィールド」の力動性や構造を読み解く方法について検討する。現在、「子ども人間学」と通底する観点から、保育を構築しようとする動きが生まれている。ニュージーランドの「テファリキ」を始めとする海外の保育の動向を捉えながら、多様で複雑な歴史、文化、社会が織り成すダイナミズムの中で、子どもが学びに向かう力や人間性を育むプロセスとそこに関わる人々（保育者、保護者等）のあり様を探究する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるまなごしを問い直し、子どもが今を生きる場（保育フィールド）の構造や力動性を捉えるための視点を学ぶ。また保育フィールドで生成する多様で多層なことがらについての具体的な事例を検討することで、それらが子どもの学びや育ちにいかに関わるのか、その「意味」を解釈する様々な視点を学ぶ。</p> <p>2. 海外の保育の動向から、子どもを起点に、保育にかかわる多様な人々が学び、変容するプロセスを捉える。そのことを通じて、保育が有する豊かな資源と新たな社会のあり方を構想する可能性を探る。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	保育のまなごし—教える、教えられる—		
2	子どもか子どもたちかという「問い」		
3	子どもの学びと育ちを捉える（1）発達と育ち		
4	子どもの学びと育ちを捉える（2）社会文化的アプローチ		
5	保育フィールドの構造と理解		
6	遊びを通じた保育（1）事例検討：身体的であること		
7	遊びを通じた保育（2）事例検討：共同的、協働的であること		
8	子どもに対する気づき（1）事例検討：なぜ気づくのか		
9	子どもに対する気づき（2）事例検討：枠組みの再構築		
10	保育における対話と同僚性		
11	保育実践と構造（1）：NZのテファリキの原理		
12	保育実践と構造（2）：NZの学びの物語と評価		
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（1）：学びあい		
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（2）：世代間循環		
15	まとめ：保育の課題と展望		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした討議のためのレジュメを担当者は作成すること。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業中に適宜参考文献を紹介する。事前学習としては、参考文献を読んで授業へ臨むこと。また、事後学習としては、授業の内容を振り返り、さらに関連・関心のある参考文献を読み込み、自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマ・関心から授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	マーガレット・カー著大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房, 2013年 マーガレット・カー・ウェンディ・リー著『学び手はいかにアイデンティティを構築していくか』ひとなる書房, 2020年		
参考文献	入江礼子・友定啓子編『津守眞講演集 保育の現在-学びの友と語る-』萌文書林, 2015年 佐伯胖編『「子どもがケアする世界」をケアする』ミネルヴァ書房, 2017年 日本保育学会編『保育学講座 I 保育学とは一問いと成り立ち』東京大学出版会, 2016年		

科目名	子ども思想史特論	副題	
担当者	米山 光儀		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	「子ども」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのでしょうか。J. J. ルソーは「子どもの発見者」といわれるが、ルソーの子ども観はルソー以前のそれと何が異なっていたのでしょうか。授業では、ルソーの教育論について講義をするとともに、演習形式で『エミール』の第2編を読み、ルソーがどのように子どもについて論じているかを検討する。		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どもの発見」とはどのようなことかを理解する。 ・ルソーの後世への影響について理解する。 ・教育学の古典に親しむ。 		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション		
2	ルソーの教育論の構造①		
3	ルソーの教育論の構造②		
4	『エミール』序を読む		
5	『エミール』第1編を読む		
6	『エミール』第2編を読む①		
7	『エミール』第2編を読む②		
8	『エミール』第2編を読む③		
9	『エミール』第2編を読む④		
10	『エミール』第2編を読む⑤		
11	『エミール』第2編を読む⑥		
12	『エミール』第3編以降の展望		
13	現代におけるルソーの教育観・子ども観の意義（発表）①		
14	現代におけるルソーの教育観・子ども観の意義（発表）②		
15	まとめ		
期末	期末試験は行わない		
授業に関する連絡	授業は、講義と演習を組み合わせで行う。演習では、受講者にレジュメを作成して、発表してもらう。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	『エミール』の序および第1編は授業のはじめる前に読み、質問事項を整理しておくこと。第2編はよく読んで、授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること		
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。		
テキスト	ルソー著、今野一雄訳『エミール』上巻、岩波文庫（第74版改版以降の版を用意すること）		
参考文献	ルソー著、今野一雄訳『エミール』中巻、下巻、岩波文庫 ルソー著、桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』、岩波文庫		

科目名	保育実践研究		副題	
担当者	高嶋 景子			
開講期	後期(隔年)	単位数	2単位	配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>「保育」という営みを探究していくためには、その実践的課題を、個々の保育者や子どもの持つ「能力」や「技術」の問題としてではなく、その「実践」に関わる多様な他者やモノ、環境等との関係の中で多層的に捉える視座が必要となる。そのように多層的に保育の営みを捉えながら、「子ども人間学」的観点に立って、自らの実践を省察していくまなざしを獲得していくため、本授業では、一人一人の受講者が実践的な場におけるフィールドでの観察や自らの実践を通して得た事例を基に、そこから見出される課題を共有し、「質の高い実践」とは何か、その在り方や構造について検討し、探究していく。</p>			
授業のねらい・到達目標	<p>保育という営みにおける具体的な事例のなかから、そこで問われるべき実践的課題を抽出し（「問い」を見出し）、それらを周囲の多様な他者やモノ、環境等との関係の中で適切に「問う」ことのできる視座を獲得していくと同時に、その視座を基に、子どもの育ちやその育ちを支える保育の在りようについて探究していくことを目的とする。</p>			
授業の方法・授業計画				
1	ガイダンス			
2	「子どもをみる」ということ①～子どもをみるまなざしを規定する子ども観・発達観／自らの枠組みへの気づき～			
3	「子どもをみる」ということ②～「子どもを共感的にみる」ということの意味～			
4	「子どもをみる」ということ③～「子どもの育ちをみる」ということ／共感的理解を妨げるもの～			
5	実践事例研究Ⅰ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く関係構造への着目～			
6	実践事例研究Ⅰ②～各自の事例報告と討議：「気になる子」を生み出す関係構造～			
7	実践事例研究Ⅰ③～各自の事例報告と討議：子どもの「遊び」と仲間集団～			
8	実践事例研究Ⅰ④～各自の事例報告と討議：「遊び」を支える活動媒体としての「モノ」への着目～			
9	保育という営みを問い直す①～「ある」から「なる」を支える保育とは～			
10	保育という営みを問い直す②～「子どものケアする世界をケアする」ということの意味～			
11	実践事例研究Ⅱ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く実践共同体への着目～			
12	実践事例研究Ⅱ②～各自の事例報告と討議：保育の場における実践共同体の持つ多層性～			
13	実践事例研究Ⅱ③～各自の事例報告と討議：実践共同体の「境界」とその柔軟性の持つ意味～			
14	実践事例研究Ⅱ④～各自の事例報告と討議：子どもの育ちを支える保育者のまなざしと援助～			
15	まとめ			
期末				
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習においては、受講者全員が、自らの観察事例もしくは実践事例と、その事例に対する考察の発表を行い、それらに対する討議を中心に授業を展開していく。			
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。			
事前・事後学習の内容	授業において、実践的な場におけるフィールドでの観察、もしくは、自らの実践を通して得た事例、および、その事例に対する考察の発表を行うため、それらの事例の収集と検討を行うこと。また、授業後は、授業時の他の事例の発表や討議の振り返りを十分に行い、自分なりの考察を深めていくこと。			
履修上の注意	実践事例の収集のために保育現場での観察等が必要となる場合は、対象園の選定や依頼については、事前に授業担当教員へ相談すること。			
テキスト	未定			
参考文献	<p>子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年 岸井慶子著『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る—』ミネルヴァ書房、2013年 大宮勇雄著『学びの物語の保育実践』ひとなる書房、2010年 柴山真琴著『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—』新曜社、2006年</p>			

科目名	保育者特論	副題	
担当者	高嶋 景子		
開講期	前期(隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>子どもが主体となって自ら学ぶプロセスをして展開される保育においては、常に、予想外の出来事が生起し、刻々と状況が複雑に変化していく。保育者は、そのような複雑な状況と対話しつつ、眼前の子どもの思いや課題を丁寧に探り、その育ちを支える関わりや活動の在りようを検討し、実践していくことが求められる。そうした保育者の専門性は、D.ショーンの指摘するように、体系的な知識や法則を適用して問題を解決するような「技術的合理性」によって成り立っているものではなく、「反省的实践家」として、その在りようを読み解いていく必要があると考えられる。本講義では、そうした保育者の専門性について探究するため、まずは、「保育」という営みや、そこでの子どもの学びや育ちを理解するための視座を検討し、それを踏まえて、保育者の専門性と、その専門性の深まりを支える「省察」のプロセスと周囲の関係構造について考察していくこととする。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるための保育者のまなざしの在りようを探ると同時に、それらの「学び」や「育ち」を支える保育実践の構造と、それを実践する保育者の専門性を読み解くための様々な視点を学ぶ。 2. 保育者の専門性が深まっていく過程と、その過程を支える周囲の関係構造について探究していくための問いの持ち方、考え方を獲得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	保育者の専門性に関する研究の動向（1）～歴史の変遷を辿る～		
3	保育者の専門性に関する研究の動向（2）～近年の研究動向を探る～		
4	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（1）～個体能力論から関係論的アプローチへの転換～		
5	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（2）～保育者を取り巻く多様な関係構造への着目～		
6	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（3）～正統的周辺参加論とは～		
7	「保育者になるということ」（1）～「子どもの声を聴く」とは～		
8	「保育者になるということ」（2）～子どもがケアする世界をケアするために：鑑識眼的なまなざし～		
9	「保育者になるということ」（3）～子どもがケアする世界をケアするために：保育における即興性～		
10	「保育者になるということ」（4）～子どもと保育者の相互主体性～		
11	保育者の学びを支える多様な対話（1）～省察的实践家としての保育者の専門性～		
12	保育者の学びを支える多様な対話（2）～事例を通して読み解く「省察」の生成過程～		
13	保育者の学びを支える多様な対話（3）～「省察」を引き出す保育カンファレンスの意義と役割～		
14	保育者の学びを支える多様な対話（4）～対話のもつ「多声性」への着目～		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献購読及び実践事例を基にした討議を行うためのレジュメの作成の担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探究心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	未定		
参考文献	<p>子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013 倉橋惣三著『幼稚園真諦』フレーベル館, 1998 佐伯胖編著『「子どもがケアする世界」をケアするということ』ミネルヴァ書房, 2017</p>		

科目名	子ども・子育て支援実践研究	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	子ども・子育て支援の実践について、前半は、家族の機能について理論的な検討を行い、OECD諸国の動向についてカナダに焦点をあてて分析する。後半は、日本の新聞、自治体広報など各種メディアの記事を共同で分析し、子育て支援実践のための理論、政策、財政のありかたについて検討する。		
授業のねらい・到達目標	1. 日本の子ども・子育て支援施策の変遷および現状について理解する。 2. 海外における施策や実践との比較から、日本の子ども・子育て支援制度の内容について理論的・実証的に分析する視点を身につける。 3. 現代社会の子ども・子育て環境やその実際について研究的な問題意識をもつようになる。		
授業の方法・授業計画			
1	家族の機能について考える (1) マードックの核家族の4機能		
2	家族の機能について考える (2) ポルトマンの仮説「生理的早産」		
3	家族の機能について考える (3) 保育・幼児教育の市場化		
4	OECD諸国における子ども・子育て支援		
5	カナダにおける子どものケアと教育 (1) 全日制幼稚園		
6	カナダにおける子どものケアと教育 (2) ドロップインセンター		
7	カナダにおける子どものケアと教育 (3) 父親休業		
8	日本の子ども・子育て支援政策の変遷ならびに現状		
9	日本の子ども・子育て支援事例の検討 (1) 幼稚園・保育所		
10	日本の子ども・子育て支援事例の検討 (2) 認定こども園		
11	日本の子ども・子育て支援事例の検討 (3) 事業所内保育施設		
12	日本の子ども・子育て支援事例の検討 (4) 病児・病後児保育		
13	日本の政策事例に対する討議 (1)		
14	日本の政策事例に対する討議 (2)		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	院生メールアドレスを通じて行う。		
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度を総合して評価する。		
事前・事後学習の内容	国内の政策や実践例について情報収集および整理を常に行うこと。また、毎回の授業内容を参照しつつ各自の課題研究を進めること。		
履修上の注意	課題発表のために授業時間外での研究調査を必要とする。		
テキスト	配布資料を中心に進める。		
参考文献	OECD『OECD保育白書』明石書店、2011年。		

科目名	児童家庭福祉特論	副題	
担当者	太田 由加里		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	児童福祉の歴史や理論を基礎として、子どもたちの生活や子どもたちを取り巻く環境を社会福祉の視点で読み解いていく。特に乳幼児期から18歳未満までの子どもの福祉問題（貧困・社会的排除・虐待・ひとり親家庭の生活上の困難・社会的養護・いじめなど）に焦点をあてる。ここ数年のコロナ禍における子どもたちは、休園や休校、分散登校、様々な行事の中止など、これまでに経験したことのない新たな局面に向き合っている。広く社会構造の中で子ども・家族・地域をとらえ直し、専門職として求められる役割と機能、援助について社会福祉の観点から省察を深める。子どもたちの時事的な事象から社会的存在としての子どもを理解し、子どもを取り巻く家族の生活上の困難を把握、その解決方法について検討する。具体的な事例を基に実践の検討から実践を研究対象とするために必要な理論を学び検証する。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 子ども人間学を学ぶうえで必要な社会的存在としての子どもを理解し子どもが抱える生活上の困難を把握する。 2. その困難を解決するために必要な教育や法制度などを学ぶ。 3. 社会経済的変化が子どもに与える影響を事象を通して理解する。 4. 日常的な子どもに関わる福祉実践を検討することから始め、それを研究の対象へとシフトさせるために必要な理論を探索、講読、その学識を身につける。 5. それらの理論が実践とどのように結びつき、日常の実践に活かせるのか、理論と実践の往還の意義を学ぶ。 		
授業の方法・授業計画			
1	コロナ禍における日本及び世界の子どもたちー児童福祉の視点から		
2	子どもを取り巻く社会的状況①日本及び諸外国の子どもたち		
3	子どもを取り巻く社会的状況②家族と地域における子どもたち		
4	児童家庭福祉をめぐる法制度①児童福祉六法や最新の動向		
5	児童家庭福祉をめぐる法制度②児童福祉関連法（学校教育法や社会保障法など）		
6	児童家庭福祉の関係機関①児童相談所や児童福祉施設、学校などとの連携を実践事例を通して討議する		
7	児童家庭福祉の関係機関②福祉事務所や社会福祉協議会などとの連携を実践を通して討議する		
8	児童虐待の現状と支援～最新の報告書や事例を基に討議する		
9	不登校・いじめ・ひきこもりの現状と支援～事例を基に子どもや家族への対応について考える		
10	ひとり親家庭（母子・父子家庭）への支援～事例を基に子どもや家族への対応について考える		
11	障害児の療育と特別支援教育～事例を基に子どもや家族への対応について考える		
12	次世代育成支援（子ども・子育て関連法や施策）～地域の子育てサロンへの視察		
13	教育と福祉を繋ぐスクールソーシャルワーカーの役割～スクールソーシャルワーカーとの討議を通して考える		
14	諸外国における児童・家庭福祉の施策		
15	総括		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式を用い、受講者の実践事例や各テーマに関する最新の報告書などを教材に討議を中心に展開する。		
評価方法及び評価基準	授業内の討論（30%）と課題（レポート）（70%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また授業の振り返りを十分に行い次回の授業準備をすること。		
履修上の注意	各自の関心領域に対し探究心を持って、授業内の討論に積極的に参加すること。		
テキスト	履修者の問題関心に合わせた文献や資料を用意する。共有文献：『社会的養護のもとで育つ若者の「ライフチャンス」：選択肢（オプション）、つながり（リガチュア）の保障、生の不安定さからの解放を求めて』永野咲、明石書店、2017年、		
参考文献	松本伊智朗(2013)『子ども虐待と家族-「重なり合う不利」と社会的支援』明石書店 アマルティア・セン 大石りら訳(2002)『貧困の克服』集英社新書 ルース・リスター(2011)『貧困とは何か-概念・言説・ポリティクス』明石書店		

科目名	家族社会学特論	副題	
担当者	小玉 亮子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	アリエスの研究を嚆矢として家族が歴史的構築物であることが認識されるようになり、それまでの家族を本質から語るような議論ではなく、家族を社会的構築物としてみ直す、いわゆる家族社会学のパラダイム転換が起こった。そして、そこから近代以降子どもに対する家族と学校の影響力は歴史的に未だかつてないほど強力なものとなったことがあきらかにされてきた。しかし、近代以降の家族と学校はいつでも期待される機能を十全に果たし得るとは限らない、家族と学校はそれぞれ課題に直面し、両者の関係は、複雑に問題を抱えることとなった。こういった家族と学校の複雑な関係に焦点を当てて、幼児教育を視野にいれながら家族の問題について社会学的に分析する。		
授業のねらい・到達目標	社会的な家族認識を学び、家族をマクロな視点及びミクロな視点から分析することによって、自らが無意識のうちにもつ家族観が普遍のものではないことを学び、自らの家族観を相対化することを試みる。同時に、家族について学校や地域との関係に焦点を当てて、家族が単独のシステムとしてあるのではなく、グローバル化が進む社会にあって、様々なシステムと相互的に存在していることを理解する。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	家族社会学のパラダイム転換		
3	近代家族とは何か		
4	近代家族と幼児教育		
5	社会変動の中の家族と教育（日本）		
6	社会変動の中の家族と教育（世界）		
7	子どもの発達と家族		
8	家族と学校の連携（就学前）		
9	家族と学校の連携（就学後）		
10	家族と子育て支援		
11	連携とパートナーシップ		
12	グローバル社会と家族（途上国）		
13	グローバル社会と家族（先進国）		
14	これからの家族と幼児教育の課題		
15	家族のゆくえ視野にいれて		
期末			
授業に関する連絡	社会における家族イメージを知るために、幼児教育と家族に関する報道などに注意しておくことは授業を受ける上で有益となる。		
評価方法及び評価基準	授業への参加及び、小レポートと研究発表を元に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前に授業前の課題を伝えるので、その課題に取り組むこと。授業後には、各自の問題意識に沿ったまとめを行うこと。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って授業に参加すること。		
テキスト	小玉亮子編(2020)『幼児教育』ミネルヴァ書房		
参考文献	藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う』ミネルヴァ書房 アリエス(1980)『子どもの誕生』みすず書房 小玉亮子編(2017)『接続期の家族・園・学校』東洋館出版社		

科目名	子ども政策特論	副題	
担当者	渡邊 英則		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	平成27年度から国の子どもや子育てに関する制度が大きく変わった。これまで縦割り行政で分かれていた幼稚園と保育所を、幼保連携型認定こども園という一つの制度としていく動きもこの制度改革の大きな柱になっている。また平成30年度からの学習指導要領改訂の動きは、小中学校の学習指導要領の改訂だけでなく、幼稚園や保育所、認定こども園も含め、日本の教育のあり方を大きく変えようとする改訂になっている。また幼児教育・保育の無償化が始まり、保育の質が問われる動きもでてきた。このような社会の動きや制度改革を見据えながら、実践する側の立場から、本来、求めるべき幼児教育・保育の姿を探求する。		
授業のねらい・到達目標	1. 制度が大きく変わるときに問われるのは理念である。国際的な幼児教育・保育の流れを見据えながら、日本の幼児教育・保育は、どのような制度になっていて、何か課題なのか等について、保育の実態も踏まえながら様々な視点から検討ができる力を養う。 2. 理念を具体的な実践として実現していく方法や考え方を獲得していく。		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	OECDの調査・提言について～世界の乳幼児教育の流れを中心に～		
3	子ども・子育て支援新制度について ～新たな制度がめざす方向とは～		
4	学習指導要領の改訂について		
5	幼稚園制度の基本的な考え方と課題		
6	保育園制度の基本的な考え方と課題		
7	認定こども園制度について（1）～制度と仕組み～		
8	認定こども園制度について（2）～実際の保育を中心に～		
9	保育の質について（1）		
10	保育の質について（2）		
11	幼保小連携について		
12	特別支援教育について		
13	海外の保育制度について		
14	実践を深めていくために必要な視点とは何か		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では履修生にレジュメの作成の担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分にしておいて自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	Peter Moss他著『保育の質を超えて』 ミネルヴァ書房、2021年		
参考文献	佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』 ミネルヴァ書房、2013年 カルナ・リナルディー著、里見実訳『レッジョ・エミリアと対話しながら』 ミネルヴァ書房、2019年		

科目名	教育学特殊研究	副題	
担当者	米山 光儀		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	「教育とは何か」という問いに対して、どのように答えるだろうか。この講義の前半では、これまでなされてきた教育の定義について検討し、新たな教育の定義を試みる。さらに、これまでの教育学の歩みを知るために、『原典による教育学の歩み』を読み、教育学の古典と向き合う時間を設ける。		
授業のねらい・到達目標	(1) 教育とは何かを自分のことばで語るようになる。 (2) 教育学の基本的な文献を読み、教育学の歩みを知る。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	教育はどのように定義できるか。(講義)		
3	国語辞書の「教育」を検討する(講義)		
4	教育事典の「教育」を検討する①(講義)		
5	教育事典の「教育」を検討する②(講義)		
6	教育の新しいモデルの提起(講義)		
7	教育のパラドックス(講義)		
8	『原典による教育学の歩み』を読む①(演習)		
9	『原典による教育学の歩み』を読む②(演習)		
10	『原典による教育学の歩み』を読む③(演習)		
11	『原典による教育学の歩み』を読む④(演習)		
12	『原典による教育学の歩み』を読む⑤(演習)		
13	『原典による教育学の歩み』を読む⑥(演習)		
14	『原典による教育学の歩み』を読む⑦(演習)		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	授業は、主に前半を講義、後半を演習で行う。演習では発表者がレジュメを作成して、行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート(50%)及び発表(50%)を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	沼野一男・田中克佳・松本憲・白石克己・米山光儀『教育の原理』第4版、学文社 村井実編『原典による教育学の歩み』、講談社		
参考文献	適宜、授業で紹介する。		

科目名	子ども環境学特論	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1年次・2年次
授業の概要	<p>現在の幼稚園教育の基本理念である「環境を通しての保育」の意義と在り方、またその実践について学ぶために、子どもと環境との関係、特に子どもと環境との相互関係に着目し、その発達過程と育成に必要な環境のあり方を論ずる。その際、今日の子どもたちを取り巻く環境の激変が、未来を担う子どもたちに与える影響を考察し、その課題を整理した上で、子どもの豊かな発達を支える保育環境や子どもに活力を与える社会環境の構築に必要な要素を検討する。子どもの視点から見た環境の捉え直しを横断的・学際的に検討する。また幼稚園等の保育現場を訪れ、保育の方法や実践について考える機会も持つ。</p> <p>子ども環境学とは何かからはじめ、とくに子どもの遊び環境を中心に取り上げながら、遊び空間の在り方、住まいの問題、安全な環境づくり、幼児教育施設、学校、医療環境、児童館・環境学習施設などの地域施設の現状などについて検討を進める。その上で、子どものための、子育てがしやすい街・都市づくりの在り方を展望し、子どもや子育て家庭を支える保育・教育実践のあり方を幅広い視点から考える。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>学生が、子どもがひと・もの・空間などさまざまな環境と関わる活動や子どもや子育てのための環境について、座学とともに、関連分野の専門家の話や、幼稚園等の保育現場の見学等を通して、子どもと環境との関係や、子どもの発達に寄与する環境のあり方を理解し、子どもや子育てにとってよりよい環境とはなにかを、学び考えることを目標とする。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	子ども環境学とは何かー幼稚園教育における「環境を通しての保育」とは		
2	子どものあそび環境（1）ー子ども時代のあそび環境、生活環境		
3	子どものあそび環境（2）ー時間、空間、集団、方法～遊環構造		
4	子どものための安全環境ーあそび環境におけるリスクとハザード		
5	子どもと保育環境（1）ー乳幼児と領域環境		
6	子どもと保育環境（2）ー園舎、園庭環境、保育と環境の構成		
7	子どもと園・地域の環境（1）ー子どもの環境に関する現状、課題についての発表		
8	子どもと園・地域の環境（2）ー子どもの環境に関する現状、課題についての発表		
9	子どもと園・地域の環境（3）ー子どもの環境に関する現状、課題についての発表、討論		
10	子どもと環境学習ー自然、環境への気づきから持続発展教育へ		
11	子どものための環境づくり（1）ー子どもにやさしい園環境づくり・まちづくりの在り方に向けて		
12	子どものための環境づくり（2）ー子どもにやさしい園環境づくり・まちづくりの在り方に向けて		
13	乳幼児施設等の視察（1）ー幼稚園、保育園等：園舎、園庭		
14	乳幼児施設等の視察（2）ー幼稚園、保育園等：園舎、園庭		
15	乳幼児施設等の視察（3）ー幼稚園、保育園等：園舎、園庭		
期末			
授業に関する連絡	本授業では講義や演習、さらには学外授業を取り入れて行う。		
評価方法及び評価基準	授業での発表・課題（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。		
事前・事後学習の内容	公園や児童館など子ども施設に足を運んで、実際の子ども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じどのようにあるべきかを考察してほしい。		
履修上の注意	各自の問題意識に基づいて授業での討論や視察に積極的に参加すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	仙田満『子どもとあそび』岩波新書、1992年／仙田満・藤塚光政『幼児のための環境デザイン』世界文化社、2003年／仙田満『環境デザインの方法』彰国社、1998年／仙田満『環境デザイン講義』彰国社、2006年／仙田満『こどもの庭』世界文化社、2015年 ほか授業内で紹介		

科目名	発達心理学特論	副題	
担当者	横尾 暁子		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	人間の生涯にわたる発達・成長のなかで、人生初期はその基盤となる重要な時期であると考えられている。本授業では、主に乳幼児期・児童期の子どもの心理学的発達をテーマとして扱い、国内外における研究成果を紹介する。 受講者は発達心理学分野の最新の論文の中から、各自関心のあるものを選び概要をまとめた上で、自身の考察や問題意識とともに発表する。論文および発表内容については、全員で討議を行う。		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 発達心理学の最新の研究成果を学び、発達や子どもとの関わりについて深く思考し、子どもという存在に対して多面的な理解を深める。 子どもの生涯の発達を見通し支えるために、発達心理学の研究成果を実践の場面でどのように応用できるかについて考える。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	心理学の研究法（実験、観察、調査、事例研究）		
3	研究計画と心理統計		
4	発達の基盤 - 遺伝と環境 -		
5	愛着の発達		
6	認知発達 - 表象の発達と概念の発達 -		
7	認知発達 - 言語発達と社会的認知の発達 -		
8	自己認知の発達		
9	道徳性と向社会的行動の発達		
10	問題解決行動の発達		
11	仲間関係の発達		
12	親子関係の発達 - 養育態度と発達 -		
13	食行動の発達		
14	保育者と子どもの関係		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は内容に応じて、講義と演習の両形式で行う。 演習は、発表と討議を予定しており、履修生に資料作成の担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内での発表および討議（50%）、課題内容（50%）に基づいて評価する。		
事前・事後学習の内容	事前：各回の授業のテーマについて、関連する基礎的な知識を確認し、自分の考えをまとめておくこと。また、配布資料や指定の文献等はよく読んでおくこと。発表担当の場合は、資料を準備すること。 事後：各回の学習内容を整理して、学期末の課題作成の準備につなげること。各自の問いや疑問点についてはさらに調べるなどして、学びを自ら深めていくことが望ましい。		
履修上の注意	履修生の積極的な参加を求める。		
テキスト	未定		
参考文献	山口真美・金沢創編著 『心理学研究法4 発達』 誠信書房 2011 渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎 『原著で学ぶ社会性の発達』 ナカニシヤ出版 2008 村井潤一 他 訳『発達心理学の基本を学ぶ』 ミネルヴァ書房 1997		

科目名	保育・教育課程研究	副題	
担当者	宮里 暁美		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>幼児期の学びを支える保育は、生涯にわたる人格形成の基盤となる重要なものである。その保育を支えているものが「保育・教育課程」である。一人一人の子どもの現状や課題を丁寧に見出し、次なる経験に繋がる保育の活動や環境をデザインしていく保育・教育過程の実際について、文献や実践を通して検討する。保育・教育課程の展開を支える保育マネジメントの在り方や、保育・教育課程を実施していく保育者の在り方、実際の保育場面の中に見られる保育・教育課程の実際などに視点を置き、「問いかける」「問う」というアプローチを取りながら学びを深める。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 幼児期の教育課程の特色について検討し、豊かな経験を生み出すための保育・教育課程を構成するポイントを理解する。 2. 具体的な幼児の姿の背景に、保育・教育課程が存在していることを確認し、計画から保育へ、保育の省察から計画へ、という循環を支える営みについて明らかにする。 3. 遊びの中の学びに着目し、学びを生み出す、教育課程の編成方法を構想する。 		
授業の方法・授業計画			
1	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：子どもの「やりたい！」が発揮される保育の実現	
2	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：幼児期に育みたい資質・能力3つの柱	
3	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：海外の実践例から	
4	文献研究	スウェーデン保育から幼児教育へ① スウェーデンの就学前学校の実践	
5	文献研究	スウェーデン保育から幼児教育へ② 就学前学校の質を支えるしくみ	
6	文献研究	スウェーデン保育から幼児教育へ③ 就学前学校カリキュラムの施行をめぐる	
7	保育観察①	保育の実際の中に身をおいたからこそその気づきをまとめる	
8	保育観察②	保育の実際の中に身をおき、自己課題に応じた学びを深める	
9	発表・討議	保育の実際から気づいたことについて	
10	発表・討議	保育の実際の中にある意味を深める	
11	発表・討議	保育とは何か？	
12	発表・討議	国内外の特色ある保育・教育課程①	
13	発表・討議	国内外の特色ある保育・教育課程②	
14	討議	豊かな経験を生み出す保育・教育課程の編成について	
15	講義	学びの振り返りとまとめ（課題レポート提出）	
期末			
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんばんを通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	事例分析や討議への参加意欲：40% 資料準備及び提案内容：30% 課題レポート：30%		
事前・事後学習の内容	事前：国内外の特色ある保育・教育課程については、各自で資料を探し提案準備を行う 事後：授業内容を整理し、学びを深める。必要に応じて、資料整理を行う。		
履修上の注意	特になし		
テキスト	白石淑江『スウェーデン保育から幼児教育へ 就学前学校の実践と新しい保育制度』かもがわ出版、2009年		
参考文献	エドガー・H・シャイン『問いかける技術』栄治出版 宮里暁美『耳をすまして目をこらす～いろとりどりの子どもの気持ち』赤ちゃんとママ社2021年 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年、厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館、2018年		